

メタ認知質問紙法短縮版MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の手引

田 崎 権 一

概 要

メタ認知質問紙法 (Metacognitions Questionnaire: Cartwright-Hatton & Wells, 1997) の短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の日本語訳版 (田崎・諫早, 2007; 田崎, 2013) の使用マニュアル (手引) である。このマニュアルでは、短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の背景と成り立ち、5つの下位尺度の意味、30の質問項目、実施方法及び集計方法、予備調査での平均値と標準偏差、信頼性と妥当性、引用文献、そして付録・MCQ-30使用フォーム (例) から成る。

メタ認知質問紙法短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の背景と成り立ち

メタ認知質問紙法短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) は、メタ認知質問紙法 (Metacognitions Questionnaire: Cartwright-Hatton & Wells, 1997) の短縮版である。

認知行動療法 (Cognitive Behavior Therapy: CBT, 又は Cognitive Behavioural Psychotherapy) にとって、(1) 認知 (何を考えるのか)、(2) 感情 (どう感じるのか)、(3) 行動 (何をやるのか) の問題が、社会的スキルを教えることにより適応行動をとらせるようにするための3本柱である (下山, 2007)。感情は認知に影響されて起こり、非合理的であり、不適切な中核的思い込み (信念: belief) は子どもの頃に作られる (図1)。不適切で偏った認知とは、全か無かの思考、自責の思考、破局的思考、感情の推論、べき思考、過度の一般化、過大・過小評価、飛躍の推論、読心的推論、予言の推論などである。

こういった不適切あるいは偏った認知傾向を回避するためには、自己をモニタリングし監視する機能により介入するメタ認知 (metacognition) の機能が必要である。メタ認知とは「自分は何を考えているのか、何を知っているのか、自分には何が欠けているのかなど、自分で自分の心的状態を認識」

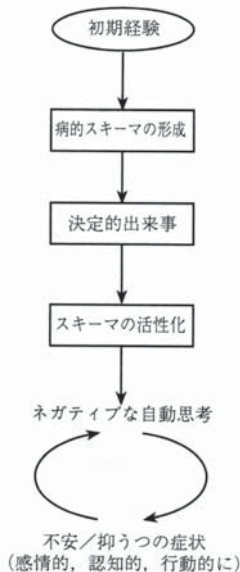


図1 感情障害に関する Beck の認知モデル (Well & Matthews, 1994a 箱田・津田・丹野訳, 2002)

(丸野, 2007)、あるいは「認知過程に関する知識、自己の認知状態やその過程の評価、認知過程やその方略の実行制御、認知活動に関連した感情的評価といった広範囲な心的事象」(橋本, 1999)である。「ネガティブに歪んだ思考が不安やうつ病などの感情障害の原因であると考え、それを修正することを試みる。その過程では、メタ認知の働きが重要となる」(杉浦, 2007)。Wells & Matthews (1994b) は自己焦点化した注意や認知的失敗が、ストレス状況下の対処行動の方略に崩壊の影響をもたらすと示唆している。「自己焦点化や個人的自己意識の気質はストレスの受け易さと正に相関している。…情緒のような内的事象や喪失・失敗体験のような外的事象が自己焦点状態のきっかけとなりうる。自己焦点と感情は相互的で、自己焦点を強めるし、その逆もある」。注意範囲の限界、信念・期待との相互作用など認知的処理過程・体系の考えから、処理様式や個人的信念から生じる必然的状况が情緒的問題を永続させ、行為選択に影響を及ぼすと考えられる。なお認知行動療法には、メタ認知療法だけでなく注意訓練も含まれる(今井, 2013)。注意訓練には EMDR (Eye Movement Desensitization and Processing: 眼球運動脱感作と

再処理法)や暴露療法 (Exposure Therapy) などがある。

Cartwright-Hatton & Wells (1997) の第 1 研究では先ず質問項目の選択が、学部学生への半構造化面接、不安症外来患者 (汎不安障がい、強迫反応障がい、心気症、パニック障がい) への認知療法記録の書き起こし文に基づいて実施された。こうして MCQ (metacognitions questionnaire) の最初の質問項目として 94 項目が選ばれた。第 2 研究では、314 名の学部学生と大学院生を調査し、主成分分析の結果、6 因子が見つかり、修正版では質問項目は 79 項目となった。第 3 研究では、306 名の学部学生と大学院生に実施し、主成分分析の結果、38.7% の分散により 5 因子 (先行研究で 6 因子であったが、ここでは 2 因子を 1 つにまとめている) を見出している。その 5 つの因子は (1) 『心配についての積極的信念 (積極的信念)』、(2) 『思考制御不能と相応の危険についての消極的信念』、(3) 『認知的自信の欠如』、(4) 『迷信・罰・責任を含む思考一般についての消極的信念』、(5) 『認知的自己意識 (メタ認知)』である。この段階で最終的で正式な MCQ としての質問項目は 65 項目に絞り込まれた。第 4 研究では先行研究同様の 5 因子が見出され、各 α (アルファ) 信頼性係数 (因子順に、.87、.89、.84、.74、.72) は容認される範囲であった。第 5 研究では 5 週間経過後の再テスト test-retest 法による信頼性検討の結果、Pearson の相関係数は .85、.89、.84、.76、.89 となり安定性を確認している。第 6 研究では他の性格検査の測度、(1) STAI、(2) The Padua Inventory、(3) The Private Self Consciousness Scale、(4) Anxious Thoughts Inventory、(5) The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) との相関係数を求め、下位尺度の妥当性を確認している。第 7 研究において、汎不安障がい患者、強迫反応障がい、汎不安障がい以外・強迫反応障がい以外の情緒障がい患者、そして非臨床群について実施し、調査参加者の診断が当時の DSM- III-R を基準に行われたうえで、識別のための妥当性を確認している。

その後、Morrison & Wells (2003) では DSM- IV 基準にした分類により、聴幻覚がある統合失調症、被害妄想がある統合失調症、パニック障がい、そして健常者群の各群に対して実施し、聴幻覚がある患者は、(1) 『メタ認知機能欠如の信念』、(2) 『心配事への積極的信念』、(3) 『制御不能や危険に対する消極的信念』、(4) 『認知的自信の欠如』、(5) 『迷信・罰・責任感に対する消極的信念』、のすべてで他の患者群よりも統計的に有意に MCQ 値が高くなったことを報告している。

以上のように MCQ の英文原語による質問紙の信頼性と妥当性は確認されている。その後、質問項目の多さが実用性の点で問題となった。上述のように正式な MCQ では 65 の質問項目に回答する必要がある。同時にこの種の内面深く自己省察が求められる質問内容の数としては、実用性や応用面から

受検者に対して多くの労力や困難の原因となっていた。そこで MCQ の 30 項目版という短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) が作成されている。MCQ の 5 因子のそれぞれについて、各 6 質問項目を選択し、30 質問項目からなる質問紙法である。

彼ら (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) は MCQ-30 の調査を学生や大学職員 182 名 (平均年齢 33.5 歳、標準偏差 11.47、年齢範囲 18 ~ 69 歳、女子 119 名) に、再テスト test-retest 法 (実施間隔は平均 34.14 日) として 30 名 (平均年齢 27.24 歳、標準偏差 7.74、年齢範囲 18 ~ 53 歳、女子 19 名) に実施し、オリジナルの 65 質問項目と同様の因子を見出した。また信頼性と妥当

表 1. MCQ-30の因子と質問項目			
No		下位尺度と質問項目	
1) 認知的自信の欠如			
1	自分の記憶を信用していない		
2	記憶力がよくない		
3	自分のしたことの記憶に自信がない		
4	場所の記憶に自信がない		
5	言葉や名前についての記憶に自信がない		
6	時々記憶違いで失敗することがある		
2) 心配事への積極的信念			
7	決心する前に深く考えることができる		
8	深く考えることでうまく取り組むことができる		
9	深く考えることで仕事を円滑に行うことができる		
10	深く考えることで問題解決に役立つ		
11	頭の中をきちんとしておくには深く考える必要がある		
12	深く考えることで問題を事前に避けるのに役立つ		
3) 認知的自己意識 (メタ認知過程)			
13	常に自分の考えていることを意識している		
14	自分の心の動きに深く注意を払っている		
15	自分の思考についてよく考えている		
16	常に自分の思考について審査する		
17	自分の思考を監視している		
18	問題を考えているとき自分の思考傾向を意識している		
4) 思考制御不能と危険への消極的信念			
19	一度気になり始めると頭から離れなくなる		
20	心配し始めると止まらなくなる		
21	心配事で病気になるかもしれない		
22	心配事があると無視できない		
23	心配事で気が狂うかもしれない		
24	心配事は脅威となる		
5) 迷信・罰・責任など思考一般への制御欲求の消極的信念			
25	思考を制御できなければ作業ができない		
26	自分の思考を制御できないのは弱さの現れだ		
27	いかなるときも思考を制御しておくべきだ		
28	思考の中には考えてはいけないものがある		
29	心配事を制御できないのは自分の責任である		
30	制御しなければ罰せられる思考がある		

性も確認できたことを報告している。その他にも、ここ 10 年くらいの間に複数の言語圏で MCQ-30 の標準化が実施されてきた。

短縮版 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の日本語訳 (表 1) は、筆者らが日本では初めて日本語に翻訳したものである。したがって、本稿『メタ認知質問紙法 MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の手引』は、この MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) を紹介している日本国内最初の使用手引書でもある。

メタ認知質問紙法 MCQ-30 の下位尺度の意味と構成

1) 認知的自信の欠如 (lack of cognitive confidence) 尺度

記憶力や注意力などの認知的な自信の欠如 (lack of confidence in one's own memory and attention capability) の項目である。

2) 心配事への積極的信念 (positive beliefs about worry) 尺度

心配することが計画立案や問題解決に役立ち、望ましい性格特徴として心配することが適切とする項目である。

3) 認知的自己意識 (メタ認知過程) (cognitive self-consciousness: metacognitive processes) 尺度

自分自身の思考過程を先ず大事にすることを反映している。

4) 思考制御不能と危険への消極的信念 (negative beliefs about the controllability of thoughts and corresponding danger) 尺度

2つの次元を反映させた心配制御についての信念である。一つは心配機能と安全保持のために制御されなければならないとする信念、もう一つは心配事を制御不能とする信念である。

5) 迷信・罰・責任など思考一般への制御欲求の消極的信念 (negative beliefs about thoughts in general, including themes of superstition, punishment and responsibility / SPR) 尺度

有害な結果を防ぐために、迷信、罰、責務などから思考制御が必要とする。

※ 当初の翻訳は MCQ-30 (田崎・諫早, 2007) で「Q8. 深く考えることはストレス解消に役立つ」であった。その後、言い回し表現への指摘があり「8. 深く考えることでうまく取り組むことができる」へと修正した。修正後の最終的な日本語訳版が「表 1」である。

実施法

対象と記入時間

問題内容の難易度から中学生以上が対象。所要時間は 10 分～ 30 分程度で記入させる。

質問紙

MCQ-30「表 1」は 5 つの下位尺度とそれに属する 6 つの質問項目一覧である。

ただし実際に使用する際には、回答者の質問項目への「構え」を排除するために、質問項目の配列順は下位尺度内の質問項目が連続しないように（表 1 の通りの順にならないように）、例えば 5 つの尺度からそれぞれから 1 項目を選択しながら一巡したらまたそれを繰り返すように、ランダムに配列し直す必要がある。本稿では実際の使用時の利便のために、その一例を本論の末尾に《付録》として添付した。集団法・個人法で共通である。

教示

質問紙の配布直後に次の教示をする。

「この質問紙は、人々が自分の思考について持っている信念に関するものです。以下には信念について、たくさんの表現があります。各質問項目を読んで、あなたによく一致する番号を○で囲んでください。すべての質問項目に回答してください。答えに良い、悪いはありません。」

評定尺度

回答者には、4 つの選択肢、

「1」＝「当てはまらない」「2」＝「少しだけ当てはまる」

「3」＝「やや当てはまる」「4」＝「非常に当てはまる」

の中から自分にあてはまる内容の番号を選ばせ、○で囲んで記入させる（4-point-scale）（参照、本論末尾《付録》）。

採点法

5 つの下位尺度ごとに集計するために、属する 6 つの質問項目の小計を算出する。

(1) 各質問項目の評定値を確認する。

(2) 尺度ごとに、6 つの質問項目の選択された項目の評定値の和を算出する。

結果の解釈

各質問項目への回答者個人の評定値（「採点法（1）」）を「表 2」「表 3」のデータの平均値（標準偏差）との差異を算出し比較することにより、各質問項目の内容から想定される問題解決場面や具体的場面に対する認知（見方）・考え方（信念）を分析し、認知様式の変更や行動の改善など、その後の対

応策を講じることで、問題解決の手がかりになるものと考えられる。「表2」のデータはある九州地区の公立大学の学生が参加した調査結果をもとに集計されたものである。他方、「表3」は「表2」と年齢層がほぼ同じであるが、中国地区の看護系専門学校学生、私立大学学生、国立大学学生が参加した調査結果をもとに集計されたものである。「表2」のデータが同一集団に属する学生からなる比較的等質のサンプルであったのに対して、「表3」のデータは多様な校種の学生からなる比較的異質で混成的なサンプルであった。「表2」と「表3」(初回)のデータの特徴的な差異が図2に現れている。

尺度内での各質問項目への評定値の和(採点法(2))を「表2」あるいは「表3」での算術平均値と比較することにより個人の数値の高低を判断できる。数値が高い場合には各尺度の意味(参照、上掲「メタ認知質問紙法MCQ-30の下位尺度の意味と構成」, p.49)傾向が強いことになる。数値が低ければその傾向は少ないことになる。「表4」でY-G性格検査における特性因子との関係で、各下位尺度の意味傾向を同時に知ることができる。

校種効果

専門学校、地方私立大学、国立大学の調査協力者が参加したデータ(表3)の分散分析の結果、統計的有意差が確認された。「心配事への積極的信念」因子の「Q9 深く考えることで仕事を円滑に行うことができる」「Q10 深く考えることで問題解決に役立つ」「Q12 深く考えることで問題を事前に避けることに役立つ」、「認知的自己意識」因子の「Q15 自分の思考についてよく考えている」において校種間差が著しい(図1参照)。

『心配事への積極的信念』や「認知的自己意識(メタ認知過程)」では、校種間差(調査協力者の集団の特徴)が生じやすいといえる(図2)。

性差

「心配事への積極的信念」因子において、男性が女性よりも統計的に有意に高得点となる傾向がある。

信頼性と妥当性

MCQ-30 日本語訳の信頼性について田崎(2015)は調査対象者234名について再検査法(相関係数、 α 係数、t検定、効果量)と項目分析(G-P分析、I-T相関分析)により検討し信頼性を確認している(詳しくは「田崎, 2015」)。 α 係数(Chronbach's coefficient alpha)はどの下位尺度も.72 ~ .87の範囲であり内的整合性・等質性が確認された。なお初回と3か月後の再検査との平均評定値をプロットしたのが図1である。各質問項目の初回と再検査との相関係数は.36 ~ .61ですべて統計的に有意($p < .001$)となり尺度としての安定性が確認された。なお初回と再検査との間で平均評定値に統計的有意差みられたのは7項目(Q2, Q3, Q8, Q9, Q18, Q21, Q30)であった。G-P分

析における上位群と下位群との間ですべての質問項目で統計的有意差が確認された ($p < .001$)。I-T 項目分析における積率相関係数は .24 ～ .68 となり統計的に有意であった ($p < .01$)。

MCQ-30 日本語訳の妥当性について、田崎 (2016) は矢田部・ギルフォード性格検査 (Y-G 性格検査) や BDI (Beck Depression Inventory: 林, 1988) と

表 2. MCQ-30の各項目の評定平均値と標準偏差 ($n = 126$) (2015年6月実施)

No	下位尺度と質問項目	評定平均値	標準偏差
1) 認知的自信の欠如		12.70	4.25
1	自分の記憶を信用していない	1.91	0.91
2	記憶力がよくない	2.10	1.00
3	自分のしたことの記憶に自信がない	1.90	1.01
4	場所の記憶に自信がない	2.18	1.10
5	言葉や名前についての記憶に自信がない	2.27	1.08
6	時々記憶違いで失敗することがある	2.29	0.91
2) 心配事への積極的信念		16.64	4.43
7	決心する前に深く考えることができる	3.04	0.89
8	深く考えることでうまく取り組むことができる	2.52	0.97
9	深く考えることで仕事を円滑に行うことができる	2.56	1.01
10	深く考えることで問題解決に役立つ	2.94	0.91
11	頭の中をきちんとしておくには深く考える必要がある	2.74	0.90
12	深く考えることで問題を事前に避けるのに役立つ	2.88	0.96
3) 認知的自己意識(メタ認知過程)		14.66	5.05
13	常に自分の考えていることを意識している	2.78	1.00
14	自分の心の動きに深く注意を払っている	2.48	1.06
15	自分の思考についてよく考えている	2.69	1.08
16	常に自分の思考について審査する	2.40	1.04
17	自分の思考を監視している	1.99	0.98
	問題を考えているとき自分の思考傾向を意識している	2.38	1.05
4) 思考制御不能と危険への消極的信念		14.40	12.70
19	一度気になり始めると頭から離れなくなる	3.17	0.89
20	心配し始めると止まらなくなる	2.90	1.05
21	心配事で病気になるかもしれない	1.59	0.87
22	心配事があると無視できない	2.93	0.96
23	心配事で気が狂うかもしれない	1.48	0.80
24	心配事は脅威となる	2.35	1.02
5) 迷信・罰・責任など思考一般への制御欲求の消極的信念		13.00	3.96
25	思考を制御できなければ作業ができない	2.36	1.09
26	自分の思考を制御できないのは弱さの現れだ	2.40	1.19
27	いかなるときも思考を制御しておくべきだ	2.18	1.04
28	思考の中には考えてはいけないものがある	2.22	1.05
29	心配事を制御できないのは自分の責任である	2.31	1.03
30	制御しなければ罰せられる思考がある	1.58	0.89
※本表は田崎 (2016) を一部改変したものである。			

表 3. 初回・再検査時算術平均、相関係数(r)、t検定、効果量(d) (n = 234) (2010年4月・7月実施)						
MCQ-30 の 因 子 と 質 問 項 目		初回	再検査	r	t検定	効果量d
1) 認知的自信の欠如 (初回時 $\alpha = .76$, 再検査時 $\alpha = .79$)						
1 自分の記憶を信用していない		2.12	2.23	.44	n. s.	.12
2 記憶力がよくない		2.51	2.64	.61	*	.14
3 自分のしたことへの記憶に自信がない		2.09	2.23	.51	*	.15
4 場所の記憶に自信がない		2.09	2.12	.55	n. s.	.02
5 言葉や名前についての記憶に自信がない		2.39	2.44	.53	n. s.	.06
6 時々記憶違いで失敗することがある		2.41	2.46	.39	n. s.	.05
2) 心配事への積極的信念 (初回時 $\alpha = .72$, 再検査時 $\alpha = .78$)						
7 決心する前に深く考えることができる		2.55	2.59	.41	n. s.	.04
8 深く考えることはストレス解消に役立つ		1.46	1.59	.38	*	.17
9 深く考えることで仕事を円滑に行うことができる		2.16	2.35	.40	***	.24
10 深く考えることで問題解決に役立つ		2.39	2.48	.46	n. s.	.11
11 頭の中をきちんとしておくには深く考える必要がある		2.44	2.42	.42	n. s.	.02
12 深く考えることで問題を事前に避けるのに役立つ		2.43	2.41	.37	n. s.	.03
3) 認知的自己意識: メタ認知過程 (初回時 $\alpha = .80$, 再検査時 $\alpha = .87$)						
13 常に自分の考えていることを意識している		2.40	2.32	.42	n. s.	.10
14 自分の心の動きに深く注意を払っている		2.17	2.10	.43	n. s.	.08
15 自分の思考についてよく考えている		2.43	2.39	.40	n. s.	.04
16 常に自分の思考について審査する		2.02	2.09	.43	n. s.	.08
17 自分の思考を監視している		1.88	1.93	.48	n. s.	.06
18 問題を考えているとき自分の思考傾向を意識している		2.07	2.21	.49	*	.16
4) 制御不能と危険に対する4消極的態度 (初回時 $\alpha = .82$, 再検査時 $\alpha = .82$)						
19 一度気になり始めると頭から離れなくなる		3.10	2.99	.44	n. s.	.13
20 心配し始めると止まらなくなる		2.79	2.78	.53	n. s.	.01
21 心配事で病気になるかもしれない		1.69	1.88	.54	**	.20
22 心配事があると無視できない		2.86	2.78	.54	n. s.	.09
23 心配事で気が狂うかもしれない		1.66	1.77	.52	n. s.	.12
24 心配事は脅威となる		2.18	2.30	.47	n. s.	.12
5) 迷信・罰・責任など思考制御欲求の消極的信念 (初回時 $\alpha = .73$, 再検査時 $\alpha = .76$)						
25 思考を制御できなければ作業ができない		2.13	2.21	.44	n. s.	.09
26 自分の思考を制御できないのは弱さの現れだ		2.30	2.23	.43	n. s.	.08
27 いかになるときも思考を制御しておくべきだ		2.19	2.29	.36	n. s.	.12
28 思考の中には考えてはいけないものがある		2.26	2.37	.50	n. s.	.10
29 心配事を制御できないのは自分の責任である		2.34	2.36	.44	n. s.	.02
30 制御しなければ罰せられる思考がある		1.56	1.77	.39	***	.25
※ α 係数: 因子名の右 () 内に併記; t検定: *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$						
n. s.: non-significant						
※ 本表は田崎 (2015) を一部改変したものである。						

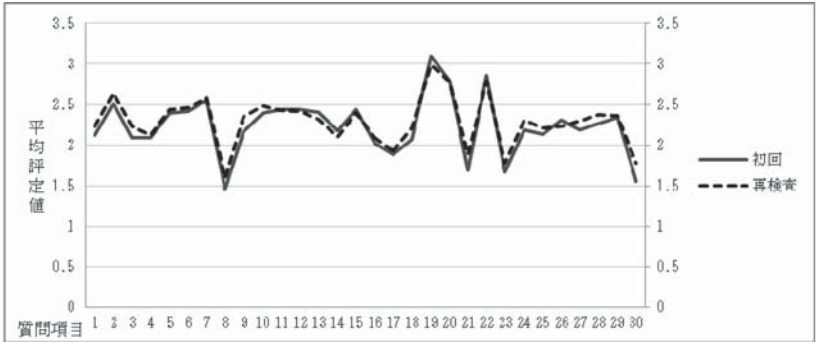


図1 平均評定値の再検査法による比較 (表2の一部図示:「田崎,(2016)」より)

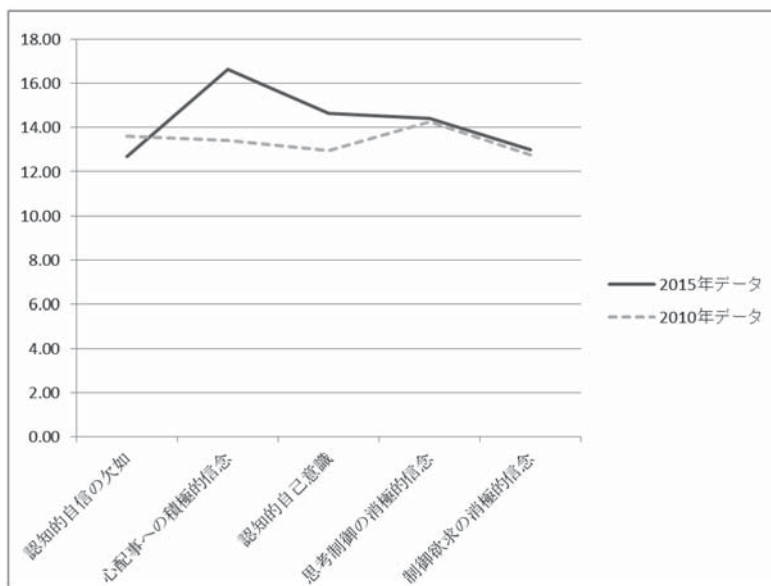


図2 因子ごとの尺度得点 (各尺度内の6質問項目の和)

※ ただし2015年データは表2より、2010年データは表3の初回実施分より図示した。

表4 MCQ-30の5因子と他の質問紙の特性との間で見られた有意な相関 (n = 126; 項目平均値・得点による)														
MCQ-30の因子	矢田部ギルフォード性格検査の特性因子													BDI 得点
	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S		
認知的自信の欠如	**	**	**	**	**	**		(**)			(**)	(**)	(**)	**
心配事への積極的信念											(**)			
認知的自己意識(メタ認知)	**	*	*	**		*		(**)			(**)			
制御不能と危険への消極的信念	**	**	**	**	**	**		(**)			(**)	(**)	(*)	**
思考制御欲求の消極的信念	**	**	**	**	**	**		(**)			(**)	(*)		**
BDI 得点											(**)	(**)	(**)	-

ただし **= $p < .01$, *= $p < .05$, () は負の相関、D:抑うつ性、C:気分変化、I:劣等感、N:神経質、O:主観的、Co:非協力的、Ag:攻撃的、G:活動的、R:のんき、T:思考的外向、A:支配性、S:社会的外向。

※ 表4は田崎 (2016) を一部改変したものである。

の相関係数を調べた。その結果 (表4)、Y-G 性格検査との有意な相関から、E 型 (不安定不適応消極型) と思考的内向の構成概念が確認された。BDI は『認知的自信の欠如』『思考制御不能と危険への消極的信念』『迷信・罰・責任など思考一般への制御欲求の消極的信念』との間で統計的に有意な相関がみられた。

工藤 (2016) は投映法の P-F スタディと MCQ-30 との関係を大学生 20 名について報告している。それによると相関係数が .4 以上になった組み合わせは以下のものであった。『認知的自信の欠如』は「自我防御型 (E-D)」と

正の、「要求固執型 (N-P)」と負の相関がみられた。とくに後者については自信がない人ほど要求固執が低く問題解決に消極的であること、逆に自信がある人ほど問題解決に積極的であるという結果であった。『心配事への積極的信念』は「集団一致度 (GCR)」と負の相関、「自罰と言訳 (I-I)」と正の相関であった。『認知的自己意識』は「自罰と言訳 (I-I)」と正の相関、『制御不能と危険への消極的信念』は「要求固執 (N-P)」と負の相関、『思考制御欲求の消極的信念』は「無責的 (M-A)」「叱責への攻撃的否定 (E)」 「防衛的自己主張 (E+I)」「短絡的攻撃反応 (E-E)」「自己欲求抑圧と他者許容 (M-A) +I)」と負の相関がみられた (「P-F スタディ」については「秦, 2001」を参照)。

その他、立川 (2016) はメタ認知的学習として学習場面での誤りの方向づけに関する質問紙法 EOQ (Error Orientation Questionnaire: Rybowskiak, Garst, Fresse and Batinic, 1999) を邦訳し MCQ-30 との関係の調査結果を報告している。それによると EOQ は「間違いを扱う能力」「間違いからの学習」「間違いの危険性の選択 (勇気)」「間違いの予測」「間違いことによる負担」「間違いの隠滅」「間違いの伝達」「間違いに対する思考」の 8 因子で構成されている。立川 (2016) は大学生を対象に調査し 42 名分を集計した。その結果、「間違いことによる負担」が『制御不能と危険への消極的信念』『思考制御欲求の消極的信念』と、「間違いの予測」が『思考制御欲求の消極的信念』と、「間違いの隠滅」が『制御不能と危険への消極的信念』『思考制御欲求の消極的信念』と .4 以上の有意な相関係数となった。MCQ-30 で測定した消極的信念の程度により、EOQ という学習場面での誤りを活用できない児童生徒を発見できることを示している。不健康な考えからの切り離しや自己修正により成績改善が期待できる。

その他の問題点

MCQ-30 日本語訳質問紙法は、臨床群における妥当性の検討と事例研究が未実施のままであるので、機会があればそのためのデータを集めたい。上述のように Cartwright-Hatton & Wells (1997) の第 7 研究や Morrison & Wells (2003) では英文原語の 65 質問項目完全版 MCQ で英語圏での臨床群における妥当性をすでに確認している。同様に事例研究による MCQ-30 尺度の実用的妥当性の検討が必要だろう。このような妥当性の検討が未実施であるために、この尺度は現時点では、臨床的診断としての使用には限界がある。しかし回答者の信念の方向性や気質的傾向を知る手段としては有効な手段と思われる。

日本語への標準化に際して言い回し wording など機会があれば今後とも洗

練させていくべきと考えている。今後もこの種の妥当性の検討を継続すべきと考える。

なお、本尺度使用に際しては研究上の使用に用いられるべきで、その他の用途については原著者ら (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の許可を現時点では得ていない。研究以外の用途の場合、著作権の問題が生じる可能性があることを付記しておきたい。

引用文献

- Cartwright-Hatton, S. & Wells, A. (1997). Beliefs about Worry and Intrusions: The Metacognitions Questionnaire and its Correlates. *Journal of Anxiety Disorders*, **11**, 279-296.
- 工藤加奈江 (2016). 質問紙法と投影法との相関的研究 “The correlation between Questionnaires and Projective method”. 熊本県立大学文学部英語英米文学科卒業論文
- 橋本憲尚 (1999). 「メタ認知」 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹数男・立花政夫・箱田裕司・編集 心理学辞典 有斐閣, p.831.
- 秦 一士 (2001). 第 15 章 P-F スタディ絵画欲求不満テスト 上里一郎・監修 心理アセスメントハンドブック 《第 2 版》 西村書店 p.160-172.
- 林 潔 (1988). ベック抑うつ尺度 (BDI; Beck Depression Inventory). 堀 洋通・監修 心理測定尺度集 Ⅲ－心の健康をはかる〈適応・臨床〉－サイエンス社 pp.140-146.
- 今井正司 (2013). 注意訓練とメタ認知療法 (〔特集〕対人援助職の必須知識 認知行動療法を知る) 臨床心理学, 第 13 巻, 第 2 号 (通巻 74 号), pp.212-216.
- 丸野俊一 (2007). 特集にあたって: 「心の働きを司る『核』としてのメタ認知」研究—過去、現在、未来— 心理学評論, **50**, 191-203.
- Morrison, A. P. & Wells, A. (2003). A comparison of metacognitions in patients with hallucinations, delusions, panic disorder, and non-patient controls. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 251-256.
- Rybowiak, V., Garst, H., Frese, M., and Batinic, B. (1999). Error Orientation Questionnaire (EOQ): reliability, Validity, and different language equivalence. *Journal of Organizational Behavior*, **20**, 527-547.
- 下山晴彦 (2007). 子どもと若者のための認知行動療法入門 日本教育心理学会第 49 会総会 (文教大学越谷キャンパス) 研究委員会企画チュートリアルセミナー
- 杉浦義典 (2007). 治療過程におけるメタ認知の役割—距離をおいた態度と注意機能の役割— 心理学評論, **50**, 328-340.
- 田崎権一 (2012). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の信頼性の検討 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, p.519.
- 田崎権一 (2013). メタ認知質問紙 (metacognitions questionnaire: MCQ) の背景と短縮版 MCQ-30 の意義 熊本県立大学大学院文学研究科論集, **6**, 17-35.

- 田崎権一 (2015). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) 日本語訳版の信頼性の検討 熊本県立大学文学部紀要, 第 21 巻 (通巻 74 巻), 15-24.
- 田崎権一 (2016). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) の他の質問紙法との関連による妥当性の検討 熊本県立大学文学部紀要, 第 22 巻 (通巻 75 巻), 147-160.
- 田崎権一・諫早正行 (2007). MCQ-30 (Wells & Cartwright-Hatton, 2004) 日本語訳版作成の試み 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, p.500.
- 立川美幸 (2016). メタ認知的学習と不安の相関的研究 “Correlational study of learning and anxiety in terms of metacognition” 熊本県立大学文学部英語英米文学科卒業論文
- Wells, A. & Cartwright-Hatton, S. (2004). A short form of the metacognitions questionnaire: properties of the MCQ-30. *Behavior Research and Therapy*, **42**, 385-396.
- Wells, A. & Matthews, G. (1994a). *Attention and Emotion: A Clinical Perspective*. Lawrence Erlbaum Associates Ltd.(ウェルズ, A.・マシューズ, G. 箱田裕司・丹野義彦・津田彰 (監訳) (2002). 心理臨床の認知心理学—感情障害の認知モデル—』東京：培風館)
- Wells, A. & Matthews, G. (1994b). Self-consciousness and Cognitive Failures as Predictors of Coping in Stressful Episodes. *Cognitive and Emotion*, **8**, 279-295.

【付記】本稿は田崎 (2013)、田崎 (2015)、田崎 (2016) の内容を「MCQ-30 の手引」としてまとめ、一部を加筆修正したものである。本研究の一部は九州心理学会第 77 回大会 (2016 年 12 月 3 日、西南学院大学) にてポスター発表した。

